



## 回 顧

### 岡 本 庄 三 郎

佛教大学に昭和61年4月に奉職してから、昨年3月末をもって退職するまで、8年間の歳月はまさに like so many hours と言っていいくらい、またたく間に過ぎ去った感がある。この間なんとか大過なく勤めることができたのは英

文学科をはじめ、大学の皆様方の御助力の賜とここに深く感謝申し上げます。その上、京都女子大学、龍谷大学、そして本学といずれも仏教にゆかりの深い大学に奉職できたのも奇しき仏教のえにしによるものと感激一入である。この度思い出を書く機会を与えられて、過ぎし日々をふり返る時、まさに色々なことが私の脳裏をかけめぐる。しかし思い出というものはどうしてもそこに語用論でいう不透明性がつきまとうことは避けがたい。そう思って考えてみると、これらの雑多な事柄は師、友、書の3点に整理されてくるように思われる。そしてこれらに関係のあることは、すでに本学や他大学でなにかの折に話したり、冊子類に書いたような気がするのであるが、重複しないように努める。

最初のトピックは約40年前、1951—52年の1年間、ガリオア制度で渡米、オースチンのテキサス大学に留学した時にさかのぼる。先日本学で今や国際的に著名な言語学者井上和子氏がアメリカにおける AT (Assistant Teaching) 制度について講演されたが、井上氏も同年度に同制度で渡米、別の大学に留学された。テキサス大学では私は E. Bagby Atwood 教授の一般音声学と古英語を受講した。氏はテキサス生まれで生粋の Texan であるが、いんぎん丁寧な態度のお方で、講義の合間の時間をさいてまで外国人留学生の発音指導をして下さ

ったり、現代英語にはないが古英語にあった音、たとえば有声両唇摩擦音や有声軟口蓋摩擦音を自ら発音しながら教えて下さったことを覚えている。私の知る限りでは、教授には *A Survey of Verb Forms in the Eastern United States* (University of Michigan, 1953), *The Regional Vocabulary of Texas* (University of Texas, 1962) の著書がある。当時テープレコーダーもあることはあったが、視聴覚器具もまだ十分に普及していなかったアメリカで、Atwood 教授はそういった器具に頼ることなく、自らモデル音を示しながら、音素を構成する異音を熱心に説明されたことは忘れられない。もうお一人 R. B. Long 教授のことを記しておかなければならない。氏の *Modern English Grammar* のコースを受講したが、実に真摯な講義であった。最初の時間に膨大なシラバスを配布されたのには驚いた。modifier と head との関係を parsing の手法で解説されたことを覚えているが、その文法理論からは伝統文法派に属すと言えよう。氏の研究室には文例などの資料が厚紙に貼られてうずたかく積まれていた。この資料がおそらく氏の名著 *The Sentence and its Parts — A Grammar of Contemporary English* (Chicago, 1961), *The System of Grammar* (Scott, Foresman & Co., 1971) となって出版されたものと思われる。なお帰国後も Long 教授は Wallace L. Chafe, *Meaning and the Structure of Language* (Chicago, 1970) は良い本だから読むようにとわざわざお送り下さったことを覚えている。

テキサス大学にも世界各国から色々なプログラムによる留学生が来ていた。丁度セメスターの始まる前の休暇期間を利用して約1カ月オリエンテーションを受けたが、fellow の資格をもった研究員の方が色々世話をして下さった。当時ATの制度がすでにあったかどうかは知らないが、前述の井上氏がお話されたATに相当する身分の方であったと考えられる。

次に旧制大阪外国語学校での恩師本多平八郎教授のことに一言ふれておきたい。氏は万葉集の英訳で知られるお方である。先日『英語青年』10月号で成瀬武史氏が「頼りになる辞書」と題する論文の中で、或る歌の「…秋はかなしき」を本多氏は‘… Then autumn seems so drear’ と訳され、この drear が「…鹿の声…」 ‘… the plaintive cries of deer …’ の deer と韻を踏んでい

る上に、この歌の場合「悲しい」色合いを出すのに極めて適切な語であることを指摘しておられる。本多氏の訳詩はすべて押韻しており、いわゆる blank verse でないことが特徴で、訳出の際の苦心談は平素の講義中でもしばしば語られていたことを思い出す。本多氏は講演を依頼されてもなかなか承諾をされないと聞いていたが、ある時、奈良県高等学校の英語教育研究会で何かお話し下さるようお願いにあがったところ、早速心よくお引き受け下さった。これには、先生の御息が海軍関係の学校に入学されていたころ、たまたま私がその学校に配属されていたことがあって、御息子とも2、3回お会いして語り合う機会があったことを先生は覚えていて下さったらしいのであった。一寸したご縁で私の願いをきいて下さったことに今も感謝の念で胸が一杯である。

次に「友」に関して一言語らせていただく。これも個人的なことで恐縮であるが、昨年8月の初め、突然長友増山学氏の訃報に接し愕然とした。氏は光華女子大学の教授で Thomas Hardy の研究家であるが、個人的にも長きにわたって親しく御交誼をいただいた間柄である。今ふり返ると、私の人生のふしぶしにおいて氏には直接間接にお世話になっている。この思い出を書くにあたり氏のイメージが心に浮かび、忘れることの出来ない my old familiar faces のお一人である。氏の思い出は尽きない。ここに氏の御冥福を心よりお祈りする。

最後に「書」のことであるが、私はどちらかと言うと語学関係に興味があり、読んだ本も文学関係よりは語学に関するものが多かったと思う。伝統文法の道を歩んできたが、最近、しばしばチョムスキー革命 (the Chomskyan Turn) と呼ばれる Noam Chomsky の言語理論に興味を持っていた。そのきっかけとなったのは Chomsky の *Syntactic Structures* (The Hague: Mouton, 1957) である。彼の重要な本はその理論の発展と共に他にも色々あるが、しかし、言語修得にかかわる普遍的な原理原則を追求するという根本理念においては上記の本から一貫して変わっていない。彼の理論を表出する文法の枠組は今後も変わるものと思われる。以上、とりとめもないことを書きお許しいただきたい。今後はし残しの仕事に打ち込んで残された人生を精一杯頑張りたいと思います。最後になりましたが、話題性に乏しい私の思い出にかかわる玉稿を、お忙しい中お寄せいただきました方々に厚く御礼申し上げます。